讃美歌入門−−歌詞を味わい、評価し、つくる

社会と讃美歌（2014.1.6）

「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」マタイ 22:38-40

■Inclusive Language（包含的言語）

「例えば "Inclusive Language（包括的表現*）" という反省がある。そこでは、礼拝における教会の言葉は、弱い人、痛んだ人々の心の傷をさらに深めるようなものであってはならない、と考えられる。」（「いのちのことば」の2003年 2 月号の巻頭言　井上義著）

＊「包括的表現」という訳語は、あまりに一般的な言葉なので、ここでは「包含的言語」という訳語を用いる。

「難解語、差別語、不快語、国家神道的用語等」『讃美歌21』 ↔「 包含的言語」
一部の人を排除することばに対して、すべての人を包含しようとすることば。

讃美歌において求められること（上掲、井上）。「自らの歌の言葉に常に反省のまなざしを向け」「あなた方が傷つくのなら私たちはこの歌を歌うのをやめよう」という決断をし「一人も疎外すること」のないことば（包含的言語）で歌おうとすること。

■Inclusive Language（包含的言語）の問題点

「一人も疎外することのない言葉」はあり得るのか：「疎外」が主観（例「私は疎外されている、ような気がする」「聞いていると、嫌な気がする」）によって捉えられる危険。
『讃美歌における不快語の読み替えについて』1988年に日本基督教団讃美歌委員会

・まずしく低き木工として→人の住まいをととのえつつ
・水夫（かこ）もまどう→弟子のさわぐ　　・たかきもひくきも→すべてのものみな

福音とは、神によって「不快」な状況から救い出されること。
「罪」の赦し、「死」への勝利、「弱さ」「貧しさ」からの解放。自分の不快な状況を認めることが救いへの一歩。不快なことばを用いずに福音を語ることはできない。ルカ15:17-19、Ｉヨハネ1:8-10

■宮沢賢治の場合。

『よだかの星』「さそりの火」における「 焼身幻想」のモチーフ。（『宮沢賢治』見田宗介）

・「まことのみんなの幸いのため」を願う心の善性。
・生きようとすれば他のムシを食べる（殺す）ことになる存在の罪性。
・「まことのみんなの幸いのため」のためなら、この身を焼いてもかまわないと願い、願いがかなえられて空の星となり燃えて輝く。浄化の願いと成就

賢司の生い立ち：商人の家に生まれながら、社会主義やトルストイズムにも関心を持ち、自分が土地の貧農に対して搾取する側にあることを深く意識。
母親への手紙「何分にも私はこの郷里では財ばつと云われるもの、社会的被告のつながりにはいっているので・・・」。

「まことのみんなの幸い」の「みんな」とは誰か。貧しい農民、彼らに対して「被告」の立場にある家の者たち。この問題と真摯に向き合うことをしなければ、それは簡単に「すべてを包含し得ない逆差別的言語」になってしまう。

□『つげまつらまほし　讃美歌歌詞に見る問題語句・表現』(1991年、日本基督教団九州教区宣教部)
『讃美歌』の中の問題語句・表現を 5 つのカテゴリーに分類収集した「問題語句・表現」のデータベース。
Ａ．天皇制・神道用語に類する語句　Ｂ．差別語・不快語に類する語句　Ｃ．意味がわかりにくい語句　Ｄ．その他問題を感じる語句　Ｅ．歌詞表現全体に問題を感じるもの